

図15 石製品・玉類実測図 (S:1/2)

1・2 滑石製石釧, 3 埴形石製模造品, 4・5 刀子形石製模造品, 6 斧形石製模造品, 7・8 棗玉

(3) 石製品・玉類

第7次調査で出土した石製品の多くは、石室南側壁東小口よりの盗掘坑の埋土から検出したものである。この出土状況から判断すると、これらは石室内からもちだされた副葬品の一部であると考えられる。

石製品はほとんどが小破片で、原形をとどめていないものが多いが、器種が特定できるものもわずかにある。それらの内訳は、滑石製石釧(図15-1・2)が3点、緑色凝灰岩製石釧が1点あり、石製模造品としては埴が1点(図15-3)、刀子(図15-4・5)が8点、斧(図15-6)が2点である。また、これらの盗掘坑埋土からの出土遺物のほか、墓境内西部の鉄製品群において、鉄製農工具に伴って鎌形石製模造品が1点出土した。滑石製品は比較的小型のものが多く、形態や石材が多様であるのが特徴である。

このほか、盗掘坑埋土の中からは2000点以上に及ぶ玉類が検出された。その8割は滑石製の白玉であるが、ほかにも勾玉や管玉、算盤玉、棗玉、ガラス玉が出土している。特徴的なものとしては大型の濃紺色のガラス玉や、線刻が施された大型棗玉(図15-7・8)があげられる。また、玉類の多くには赤色顔料の付着が認められ、滑石製品同様、石室内の副葬品の一部であったと考えられる。(林)

(4) 中世以降の土器

11トレンチ拡張区から出土した土師器皿(図16)は、口径9.1cm、器高2.0cm、厚さ0.5cm前後に集中している。色調はにぶい黄橙色を呈する。手づくねで成形されており、口縁部外面に2段にわけてナデ調整が施されている。内面にもナデが施され、最後はナデ上げられているものや底部不調整のものもみられる。これらの法量や製作技法から、第6次調査の際に15トレンチから出土した土師器皿と同様に、12世紀後葉から13世紀初頭のものであると考えられる。後円部頂の北東部で検出した掘り込みからも、口縁部外面を2段に横ナデした、12世紀後葉から13世紀初頭のもものとみられる土師器皿が出土している。また、石室南側壁中央付近の盗掘坑から窯道具の匣鉢が出土したが、時期は不明である。(大野)

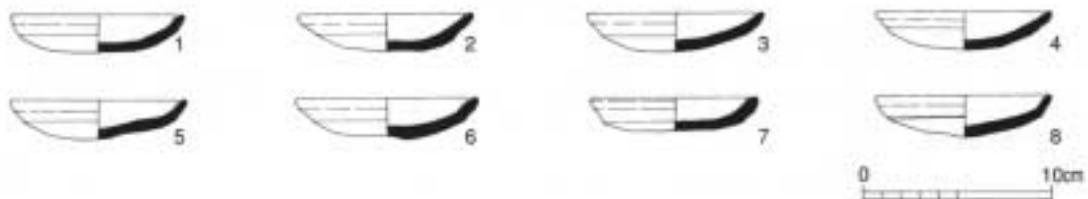


図16 中世土師器皿実測図 (S:1/4)